

ロボティクス技術 自動化領域の拡大により投資機会が広がる

資産運用サポート部グループマネージャー菅野晶人氏に聞く

■ファンドの特徴

日興アセットマネジメントの「グローバル・ロボティクス株式ファンド」（1年決算型）（年2回決算型）（為替ヘッジあり・1年決算型）（為替ヘッジあり・年2回決算型）の最大の特徴は、世界的な社会課題である労働力不足を自動化で克服するという「必然のニーズ」をコアテーマにしている点と考えている。人手不足は先進国だけでなく新興国の一部でも課題になっていると認識している。先進国に関しては2019年が生産年齢人口のピークで、以降12%減となる1億人の減少を記録している。中国では22年から総人口が減少に転じているといわれる。労働力不足は世界的に懸念される社会課題であり、人手不足からくる人件費高騰や生産性低下などは企業へ影響を与えている。国レベルではGDPの低下につながる可能性もある。こうした事態を救うのがロボティクスによる自動化・自律化の技術であり、当ファンドではこれらの技術で社会課題の解決に資する企業に投資している。

当社のロボティクスの概念は、センサー、AI、ロボット（駆動技術）でこの3つの要素で構成される領域と捉えている。ロボティクス＝ロボットファンドと誤解されやすいが、ロボットは一構成要素に過ぎない。リアルとバーチャルの両面からあらゆる産業のイノベーションを支えているのがロボティクスといえる。

昨年登場した生成AIは、これまでの「目に見えるロボット」に対して、「目に見えないロボット」ということができる。生成AIがオフィスにおける仕事を代替するという点で、目に見えないロボットとしてオフィスワークの自動化することで生産性向上や効率化にも大きく寄与すると考えている。

目に見えるものと目に見えないものという2つのくくりではなく、目に見えるロボットに生成AIが搭載される形になるため、自動化の領域が広がり、それにより投資機会の増大や厚みのある銘柄選定が可能になる。生成AIは今後、当ファンドの成長ドライバーになっていくものと考えている。

■ファンドの魅力

半導体、日本株、資本財の3つの観点から紹介したい。

◎半導体

当ファンドでの半導体・半導体製造装置関連銘柄の組み入れ比率は2月末現在で29.4%と、約3割投資している。半導体とロボティクスは切っても切れない関係にあるが、半導体は情報の取り込みや計算、情報処理や機械の制御などで重要な役割を果たし、電子製品

にとっても必要不可欠である。当然、自動化や省電力化が進展すればするほど半導体に求められる役割は大きくなる。今後は従来の観点に加えて、生成AIの誕生によってAIサーバーを格納するデータセンターに注目している。

◎日本株

当ファンドの組み入れ上位10カ国の中で、日本への投資比率は27.4%（2月末現在）。グローバルエクイティという商品の中で日本株に3割近く投資している商品はあまり多くないだろう。日本は産業ロボットの技術を支えているメーカーが多く存在しているという背景がある。日本は半導体製造装置の分野が強く、トップシェアを持つ企業が多いことにより、当ファンドにおいては日本株の半導体に積極的に投資している。また先進国を中心に生産拠点の分散化や自国回帰の動きという観点からも日本株が恩恵を受けやすい環境にあると考えている。

◎資本財

ロボティクスにおける製造業などの「リアル」を支える技術が資本財にある。現在、日米の製造業はダウントレンドにあるが、先行指標の米建設支出を見ると1、2年前から新しい工場の新設が増加している。日本においても22年ごろから製造業向け建設投資が上昇トレンドにある。また日本の工作機械受注は、サイクルで動く指標として認知されているが、過去の検証によると平均の下落期間は24カ月、一方、平均の上昇期間は34カ月である。22年3月をピークとする現在の下落サイクルは24年1月で22カ月目に当たる。日米ともに製造業の足元の実態はさえないものの、先行指標は右肩上がりであり、見通しは明るいと考える。また世界的にサプライチェーンの再構築が進んでおり、国内回帰のリショアリング、自国に近いところに回帰するニアショアリング、同盟国に工場を作るフレンドショアリングといった、経済の地産地消に向けた動きが起きている。これらも資本財にプラスの要因になってくる。

■新しい投資テーマ

今後の投資テーマとして4つある。

1つ目は「予防保全」。センサーの進化により、データを取得し、それがビックデータとなる。そしてAIがディープラーニングすることでエラーの予兆を捉えるができるようになる。

2つ目は「AIビジョン」。AIを駆使して自動で検査することができるようになる。

3つ目は「デジタルツイン」。コンピュータ上に現実と同じ、工場の製造ラインあるいは製品を再



現する、デジタル上の双子を作り上げることで、わざわざリアルの世界で作り上げなくとも仮想空間上で見える化することができる。仮想空間上にできる工場の製造ラインや製品に対して分析やシミュレーションをしたりすることにより最終的にはコストの削減や業務の効率化が期待できる。デジタルツインの技術は工場だけでなくヘルスケアやサービス産業などセクターを問わず導入される。例えば、メディカルメタバースと呼ばれる分野で、人間の心臓をバーチャルの空間で再現、それをもとに手術計画を立てることに応用できる。

4つ目は「ギガキャスティング」。テスラが導入したことで知られるが、電気自動車の新しい工場などでギガキャスティングの技術を使った巨大なロボットがプレス加工のようにしてパーツを製造するものだ。クルマのフレームを作る場合、従来は171点の品目で2時間を要してパーツを作っていたが、ギガキャスティングであればわずか2分でできる。

■パフォーマンス

1年決算型と年2回決算型は08年3月15日に設定、8年半ほど経過している。長いトラックレコードを有し、3月11日現在で基準価額は37,000円と3.7倍に達している。世界株式の指数を大きく上回る成績を残しており、直近でも設定来高値の更新を続けている。設定来、様々な出来事があったが、足元の景気や業績ではなく、構造的な変化、また構造的な変化によって何が起きているのかに着目した投資を行ってきたことが、好調なパフォーマンスを維持している要因と捉えている。

当ファンドを実質的に運用しているのはラザード社である。同社は、企業の本質を見極め、納得できる価格でしかないと投資しないという姿勢を貫いている。また、高い政策金利が長期間続く可能性や、景気後退懸念があることは、財務体質が強い企業と弱い企業の格差の拡大につながると考えている。財務体質が強固で安定したフリーキャッシュフローを創出できる質の高い企業に焦点を当てて投資しており、外部環境の変化にも対応できるポートフォリオとなっていると考えている。